戦後京都、橋の下に住まう人々

本岡拓哉（第 15 部門研究）

第 15 部門研究は、近現代の京都の人びとの「くらし」や「まち」をめぐる社会・政治構造の解明を目的とする。空間と社会とを関係的にかつ動態的に捉える見方を共通の研究の視座に設定し、近代から現代にかけての京都という都市の種別性を示すとともに、京都特有の都市の奥行きが成立する要件をも明らかにすることを目指している。今回の合同報告会では部門研究会の活動内容として、個別の研究発表に加えて、京都市内外各所へのフィールドワークを通じて研究メンバー間の交流を図っていることを示した。その後、代表者の本岡拓哉が個別の研究成果として、1950 年前後から 1960 年代中頃までに京都市内に見られた橋の下に住まう人々の生成、そしてかれらの生活実態のあり方に関する報告を行った。

後者の研究成果の内容は以下の通りである。終戦直後からの『京都新聞』の記事を辿ると、1948 年頃から橋の下に住まう人々の存在が報じられて以降、1950 年代には橋下居住者が多く取り扱われることになる。そうした記事から認識できるのは、当時の社会状況に翻弄されながらも、橋の下に住まう人々の来歴がそれぞれ多様だったことである。新聞記事とともに、京都市公文書「鴨川筋・高野川筋・桂川筋橋下居住者調査票（昭和 38 年実施）」を踏まえれば、単身だけではなく家族世帯も含まれており、不安定な状況に置かれているとはいえ、バタ屋（廃品回収業）をはじめ何らかの労働に従事していた。このように橋の下に住まう人々は能動的であるとともに、連帯や孤立、排除や温情などコミュニティ内外において複層的な社会関係のなかで存在していたことも指摘した。それらは決して一筋縄では理解できない，橋の下に住まう人々の姿でありかれらの境遇であった。

以上の個別研究を本部門研究の課題に照合すれば、「非住宅」としての橋の下において多様な生活実態があったこと、またこうした空間がアジールとしての機能を有したことなど、これまでほとんど注目されてこなかった戦後京都の多面的な社会性・空間性を明示しうるだろう。さらには、居住者数に加えて、新聞記事数の多さや温情的な論調の存在も京都固有の都市性を表しているのかもしれない。今後、さらなる調査研究ならびに研究メンバーとの研究交流を通じて、こうした点もより深く論究していきたい。